

第 29 回いたばし国際絵本翻訳大賞 英語部門 講評

今回の課題絵本 Wish は、動物たちの友情の物語。森には年に一度、「wish」が飛ぶ日があります。運よく、「wish」を捕まえることができれば、願いごとがかなうのです。今年、「wish」はウサギのもとに舞い降りました。しかも、三つも！ なにを願おうかと悩んだウサギは、仲良しの友だちのところへたずねにいきます。小さなネズミは空を飛んでみたいそう。キツネは物語を書きたいと言います。そして、クマは舟に乗って海へ出たいと打ち明けます。そこで、ウサギはさっそく友だちの願いをかなえました。そうしたら、なんと自分のぶんがなくなってしまっ……！

むかしばなしによく出てくる〈三つの願い〉にはさまざまなバージョンがありますが、この絵本は、動物たちがみなで海へ出かけるというハッピーエンドになっています。

さて、今回、一番みなさんが頭を悩ませたのは「wish」の訳ではないでしょうか？ 絵本のタイトルでもあり、お話のキーワードでもあります。もちろん「願い」のことですが、そのまま訳すとちょっと抽象的になってしまいそうです。絵を見ると、タンポポの綿毛に似た姿で描かれている「wish」。みなさんがさまざまに工夫されているのが、訳からひしひしと伝わってきました。

まず、一次審査では、

- ・ 誤訳はないか
- ・ 読みやすい文章になっているか（ちゃんと日本語になっているか）
- ・ 誤った日本語が使用されていないか
- ・ 誤字脱字はないか
- ・ 台詞の口調がその登場人物にあっているか。また、作品内で統一されているか（途中でキャラが変わっていないか）
- ・ 絵本にふさわしい言葉・漢字が使用されているか（対象年齢が意識されているか）
- ・ 原文にない勝手な補足（不必要な付け足し）がされていないか
- ・ 不必要・不自然と思われる極端な幼児語が使われていないか

などの基本的なことに加え、文法を中心に間違いやすいところなど70以上のチェックポイントを作り、評価しました。今回は全体的に、例年よりややミスが目立ったので、チェックポイントを多めに紹介しておきます。

P.1 you have to be lucky to be chosen by a wish

直訳は「wish に選ばれるには lucky でなければならない」だが、自然な日本語になるように工夫する。Lucky な者だけが wish に選ばれるという状況がわかるように。また、「you」は不特定多数を表している点に注意。「動物」や「ひと」という言葉を使わないで訳せばベター。

P.4 Rabbit was amazed as wishes danced and rose, then all of a sudden, one landed on his nose!

舞い上がる wish に見惚れていたら、次の瞬間、鼻にひとつおりてきた、という状況。「鼻にひとつおりてきたのでおどろいた／おどろいたことに鼻にひとつおりてきた」という訳にならないように注意。

*ここは二次審査に残った方でも、間違いが多かったところです。

P.5 Rabbit had never caught a wish before.

直訳は「Rabbit は今まで一度も wish をつかまえたことがなかった」だが、すでにつかまえているので、「wish をつかまえたのははじめてのこと」という方向に訳すほうがベター。

〃 **what to do with a wish**

「wish をどうしたらいいか」と直訳すると少し不自然なので、「なにをねがったらいいか」などと工夫するとベター。

P.6 What would you wish for?

仮定法の「would」に注意。「もしきみなら～」というニュアンス。ただし不自然な口調にならないようにする。

〃 **His friend climbed up from the woodland floor.**

「森の地面からのぼってきた」などと直訳すると不自然なので、表現を工夫する。

〃 **I feel so small**

「feel」であることに注意。物理的に小さいだけでなく、ちっぽけな存在に感じるということ。P.20 の「feel uplifted and tall」や P.23 の「feel tall」と関連しているので、そこと合うように意識して訳す。

P.10 Wondering what his friend had in store

大文字で始まっているが前の文章につながっている。友だちの Fox の心の中にあるもの（ねがい、のぞみ、思いなど）を考えながら（質問した）、という意味。「store」は「店」ではな

いので注意。また、「～と思いながら。」など、わかりにくい不完全な文章にならないように注意。

〃 **everyone would admire**

「admire」が難しい訳語にならないよう注意。

〃 **power to inspire**

「インスピレーション」などと訳すと読者には難しいので、「ひらめき」「感動」「心を動かす」「心をゆさぶる」など工夫する。

P.18 Rabbit wondered about the rowing

船（ボート）をこぐところをウサギが想像しているのがわかるように訳す。

P.19 And now,

「さて」とひと呼吸おいて、いよいよウサギの番という感じが出るとベター。

〃 **he finally asked himself**

finally は「最後に」ではなく「とうとう」「ついに」というニュアンス。

〃 **"What should I wish for?"**

「I」のイタリックに注意。「ぼくだったら」「ぼくなら」というニュアンス。

P.20 (全体)

I wish ではじまる3文が、3つ持っている wish の願いごとをしたのだとわかるような訳文に。

〃 **I wish for inspiration to wash over us all.**

「wash over ~」は「〈人〉の心をよぎる」「感情などが押し寄せる」などの意味。また、「us all」は4匹だけを指しているわけではない点にも注意。

P.22 if you don't mind ?

「もしよかったら」という意味。「きいてくれる?」「いいかな?」など、文脈に合うように工夫する。

P.23 By noticing me,

「notice」はただ「気づいた」だけでなく、相手を対等に見て友だちになったり大事な質問

をしたりといったニュアンスを含んでいる点に注意。

P.24 Creating amazing stories so wonderfully exciting!

[I am busy] creating amazing stories [that are] so wonderfully exciting! という意味であることを読み取れているか。つまり前の文の writing と韻を踏ませるために、Creating wonderfully exciting amazing stories とせずに、意図的に exciting を最後にしていることが理解できているとベター。

*ここも、二次審査でも間違いが多かったところです。

〃 **selfless deed**

直訳すると「無私の行為」。難しいので、「ともだち思い」など表現を工夫する。自分の願いはさておき友だちの願いをかなえたことがわかるように。

〃 **a story you wish me to read**

Rabbit が読みたい本ではなく、Rabbit が Fox に読んでほしい本であることに注意。

P.25 over the horizon, beyond the sandy shore

韻を踏むために shore を後にしているだけで、実際には砂浜を出て水平線の向こうへ、という順番。

〃 **if you have a moment, please come with me...**

「ちょっといつしよにきてくれるかな」というニュアンス。「if you have a moment」をきちんと「時間があるなら」と訳すと翻訳調。

〃 **Bear asked Rabbit to close his eyes**

クマがウサギに目をとじるように言っているシーン。「close one's eyes」は直訳すると「目をつむる」だが、絵は目隠しなので「目かくし」としても OK。

P.28 It is never too late to go on an adventure

「冒険に行くのにおそすぎることはない」「冒険はいつからだってはじめられる」というニュアンス。

こうしたチェックを経て、**応募の 776 作品中、28 作品**が最終選考に進みました。

さて、「wish」の訳ですが、物理的に舞い上がったり、ウサギの鼻や足もとにおりてきたりするので、「願い」という抽象名詞だと、読者である子どもには通じにくそうです。最終

審査会でも、「すばらしい訳」と話題になったのは、最優秀翻訳大賞の方の「ゆめわたげ」。この物語におけるイメージとも、絵とも、ぴったりです。優秀賞の方は「ネガイノタネ」。これも、カタカナにしたことで、“固有名詞”感が出て、いいなと思いました。「ねがいのたね」「ねがいがかなうたね」など、意味を最優先して訳されている方も多かったです。もちろん、まったく問題のない、とてもいい訳だと思います。ただ、最初に書いたようにタイトルでもあり、キーワードでもあるので、「ゆめわたげ」のような名前があると、読者も絵と結びつけやすく、訳にもリズムができると思いました。

また、次にみなさんを悩ませたのが、韻を踏んでいるところをどう訳するか、ということだったかもしれません。例えば、P.1の「flight/light」「swish/wish」など、韻を踏んでいる文章がたくさんあります。これを日本語で再現するのは不可能に近いので、一次審査では、応募訳は韻を踏んでいなくても減点なし、ただし、うまく工夫してあれば加点、という形を取りました。

子どもを読者とすることが多い絵本では、(訳文で)無理に韻を踏んで、ストーリーの流れや意味がわかりにくくなると、読者が置いてけぼりになってしまうことも少なくありません。こうした場合、日本の読者には、韻を踏んでいる原文のリズムのよさや、音読したときの楽しさを伝えることが大切だと、わたしは考えています。最優秀翻訳大賞の方は、この点も見事に再現してらっしゃいました。「きたいに ふくらみ きらりりり／ふわふわ、ヒュン、おどるる」。一見大胆な訳ですが、原文に使われている言葉はちゃんと日本語に移されていることがわかると思います。音読したときの楽しさは格別。何度も読んでいううちに、子どもなら覚えてしまいそうですよね。

同じ箇所でも、丁寧に意味を拾っている訳も紹介しておきます。例えば、特別賞の方。「ゆめと きらめく ひかりを いっぱい つめこんで／かぜに ふかれて、ねがいのたねはおどります。くるくる、ひゆるるん」。こちらも、読みやすいリズムの訳文でした。入賞した方々はみなさん、それぞれの文体で訳され、それがぶれることなく、物語に流れを作り出し、ひとつの作品としてまとまっていました。

流れと言えば、ストーリー自体の流れも重要です。例えば、P.8の **And he thought to himself** というところ。「think to oneself」は、声に出さずに心の中で言っている状態。ここのAnd以下を「でも、これってぼくが願いたいことかな?」というように訳している方が多かったです。けれども、その後、ウサギは友だちの「願い」を願うことになるので、「でも」と訳すと、ストーリーのつながりが悪くなると思いました。

また、友だちの願いが実現するという流れをはっきりさせるためにも、例えば P.10の「inspire」は P.20の「inspiration」や P.24の「inspired」とつながるので、それがわかるように訳語を合わせるのがベストでしょうし、P.23の you helped me feel tall は、P.6の「feel so small」や P.20の「feel uplifted and tall」とつながるような訳にしたいです。

あと、もっと単純な「流れ」として、P.16の絵は、左からクマが①山を旅し②岩に上り③木に登るという順で描かれているので、訳もそれに合わせることや、P.25の **over the**

horizon, beyond the sandy shore も、「水平線を超えて、砂浜のむこうで」の順番だと不自然なので、やはり「砂浜のむこうへ、水平線を超えて」の順に訳すべきだと思います（英文は韻を踏むためにこの順番になっています）。

翻訳も、時代を反映します。例えば、過剰な「女言葉」は、今ではあまり使われません。今回、Rabbit は「his」で受けているので男の子だとわかります。でも、ほかの動物たちの性別は不明なので、訳者の判断で設定することになります【注：作品によっては、作者に確認すべき場合もあります。また性別を感じさせない口調／一人称を選択することも可能です】。無自覚／無意識に全員男の子にしたり、(従来の)動物のイメージで性別を決めたりせず、一度立ち止まって考えてから訳すようにしたいところです（その結果、考えがあって、全員男の子にするという判断も、もちろんあると思います）。その上で、それぞれのキャラクターが“立つ”セリフの訳ができるといいですね。その点でも、最優秀翻訳大賞の方は、キャラクターの一人称を「ぼく」「おいら」「わたし」「オレ」と訳し分けていて、耳で聞いても、それぞれのキャラクターがくっきりと“立って”いると感じました。

最後にひとつ。今回は、難易度が高かったこともあり、いつもよりも少々誤訳が目立ちました。入賞された方々にも、誤訳があったり、「絵本にふさわしい言葉・漢字が使用されているか（対象年齢が意識されているか）」「原文にない勝手な補足（不必要な付け足し）がされていないか」といった「基本的なこと」（と最初に挙げたもの）がクリアできていないところもありました。来年度以降、もしまたご応募いただけるなら、ぜひ最初に挙げた「基本的なこと」を見直してみてください。

一方で、入賞された方々は一語一語、一文一文訳しながら、最終的には一冊の絵本がひとつのまとまった作品になるように、ストーリーや文章の流れを大切にして、訳してらっしゃいました。翻訳は、作品の魅力を読み取り、それを読者に最大限伝えられるようにする作業です。もちろん言うは易く行うは難しいのですが——でも、翻訳はその作品を味わい尽くせる楽しい作業だと思っています。わたしも毎年、応募作品からたくさんのことを学んでいます。みなさまが翻訳にそんな楽しみを見つけてくださいますように。

英語部門 審査員 三辺律子